

多言語状況における日本語

東京大学教養学部 平野健一郎
国立国語研究所 西原 鈴子

現代の国際関係における多言語・多文化状況の特徴と問題性を残酷なまで赤裸に示しているのは、なんとといっても旧ユーゴスラビア、特にボスニア・ヘルツェゴビナの惨状である。ユーゴスラビア半島の最近の激変は、中欧およびバルカンの長く、複雑な民族関係史の流れのなかで捉えなければ、正確には理解できないが、第一次世界大戦以後の歴史に限定して、一言で要約してみると、一言語・一民族・一国民・一国家を理想とした近代のパラダイムへのしっぺ返しとすることができる。

第一次世界大戦の終了と同時に誕生した「ユーゴスラヴ国家」は、ウィルソンの14か条に含まれた「民族自決」(self-determination)の「申し子」とみなされ、近代的パラダイムを実現すべく、国内の民族集団間の葛藤を強引に封じ込めようとした。第二次世界大戦の終了と同時に生まれた「ユーゴスラビア社会主義連邦共和国」も、チトー大統領の指導の下、統一国民国家へのこだわりを続けた。冷戦の終焉とともに顕在化したユーゴの民族紛争は、第一次大戦以後、長く「民族自決」の原則に振り回された結果にほかならないとあって過言ではない。歴史の後知恵にすぎないが、国内の各民族集団の文化・言語を尊重する政策を採用していれば、国家の分裂は防げたのではなからうか。少なくとも、これほどの民族紛争の悲劇は避けられたかもしれない。

「民族自決」原則によって組織された国際連盟に続いて、国際連合も同じ原則に則って国際社会を組織している。ということは、今日の国際社会、今日のすべての国家が、本質的には、ユーゴスラビアと同じ問題を内在させていることを意味する。現在、国連の改革が世界的な課題になっているのはその現れであろう。国内的にも、国際的にも、文化の多様性を尊重することができるように、「自決」原則を民主的に再構

築することが課題となっていると思われる。

さて、「言語事象を中心とする我が国をとりまく文化摩擦の研究」研究班は、第二年度も、今日の国際社会、国内社会に見られる多言語・異文化接触状況のなかでの日本語の変化のダイナミクスを解明し、それによって日本語の国際化の状況と可能性を考察しようとしている。日本語の使用者を増やすというような単純な視点からの日本語の国際化ではなく、日本語が現に国内的にも、国際的にも置かれている多言語状況、国際化現象を学問的に観察し、考察することが、上述のような大きな課題への解答にもやがてつながるのではないかと考えられるのである。

本研究班の構成は、昨年同様に、大きく二つに分かれている。東京大学教養学部グループ(駒場グループ)は、日本語の国際性を国際関係の歴史と国際社会論の視点から考察している。国立国語研究所グループ(西原グループ)は、日本国内の地域社会において多言語・異文化接触状況に置かれている日本語の国際化現象の解明を続けている。

駒場グループは、さらに、国語・国文学の歴史を国際的な視点から見直す研究を進める神野志(隆光)チームと、国際社会学の視点に立つ山本(泰)チームに二分されるが、「多言語状況と日本語」研究会を合同で形成して、緊密に連携しつつ研究活動を行っている。第一年度の共同研究によって、日本語はそもそも歴史的に国際語であったという認識が、研究分担者の間に基本認識として共有されることになっている。

神野志隆光と小森陽一は、それぞれ古代日本国家生成期からの残存資料と、近代日本初期の言文一致運動の資料の分析によって、「日本語」の国際的な形成過程を明らかにしつつある。藤井貞和は中古文学作品の国際性を綿密な分析によって明らかにする研究、エリス俊子は日本近代詩の国際比較研究を進めるかたわら、オース

トラリアとマレーシアという多文化・多言語国における日本語教育のあり方についての研究を行っている。研究会では、本年度は、米国からの「帰国子女」で、日本語で創作活動を行っている作家、水村美苗氏の日本語論を聴取したほか、韓国から崔在 教授の参加も求め、不自由なく日本語を使用する韓国人の内部における言語摩擦と言語変化を考察していく予定である。

山本泰、山中速人は、それぞれ北米西海岸とハワイのマイノリティー集団の言語・文化・社会状況の分析を続けており、中井和夫は、「民族自決」原則と複雑な関係の歴史を持つウクライナ人の言語の特徴を、最近の政治的変動と関連させて解明しようとしている。平野健一郎は、国際社会の長期的な歴史のなかで言語がどのような位置を与えられてきたかを、新たな視点から再整理しつつある。

駒場グループでは、今年度から自然科学研究における使用言語の問題、とりわけ日本語使用の問題も取り上げることとし、教養学部の自然科学研究者を次々に研究会に招いて意見交換を行うことにしている。この研究会は新プロ全体に公開される。

国立国語研究所グループは言語学的視野から、言語運用の実態調査を通して、日本語をめぐる国際化現象を観察・研究しようとしている。観察・研究対象とする人々は、近年急増している在日日本語非母語話者、在日日本語母語話者（＝ふつうの日本人）および在外日本語母語話者（＝海外在住日本人）である。現在われわれの周囲で日常的に起こっている言語行動的接触中には、どのようなコミュニケーション・パターンが見いだされるのか。それらがどのようにして文化摩擦の引き金となるのか。すべての摩擦が常に誤解（ミスコミュニケーション）を引き起こすのか。文化摩擦はどのように回避され、解消され得るのか。それらの疑問を出発点として、観察対象者それぞれの言語運用の実態をできる限り忠実にデータベース化すること、そのデータベースにそって言語使用者の意識を掘り下ることによって、研究テーマの核心に迫ることを目標としている。

「文化」摩擦の原因となり得る言語運用は、日本語で意思の疎通をはかろうとする人々の第一言語の差（母語は何か）のみに起因するもの

ではない。また異「文化」接触は、Ethnicity を異にする人々の間（なに国人か）の接触に限定されるものではない。同地域に住む同言語話者の間にも世代差、性差、社会的環境の差、その地域における居住年数の差などによるコミュニケーション・パターンの違いが見られる。同様の違いは地域差、職業差などに起因することもある。一方、異言語の話者の間にも世代差等の要因によって、共通のコミュニケーション・パターンが見られることも観察されている。

言語、人種、国籍などの差をその他の諸要因と等分に捉え、「文化」的現象を総合的・複眼的に分析することによって、異言語・異人種間の接触のみを文化摩擦の原因としがちなステレオタイプに陥らずに、普遍的・客観的コミュニケーション・モデルが構築できると予測している。

国語研グループは調査観察対象および調査観察方法によって3つのチームに分けられる。地域レベルのニューカマーを中心とするネットワーク形成とその発展を参与観察によって記録する古川チーム、在日外国人および在外日本人がそれぞれ第二言語をめぐる引き起こす言語行動の問題を意識調査する西原チーム、日本国内の各地域において言語行動に関する自意識と他地域の言語行動に対する意識がどう展開するかを調査する杉戸チームである。

古川チームは他の二つのチームとは調査研究方法を異にしている。地域社会における言語的少数派・多数派の相互接触・学習の過程を、その過程の構成員の一人として参加しつつ観察することを研究の手法としている。西原・杉戸チームは、現象の捉え方は古川チームと共通するものの、言語運用に関する意識を「掘り出す」調査研究方法を選択し、調査項目、調査媒体としての刺激ビデオの使用など調査方法を共有している。

各チームとも昨年度に引き続き担当調査地域での観察・調査を継続する。新たに加わるものとしては、杉戸チームが調査地域に仙台・弘前を加えること、西原チームが海外での主たる調査対象をそこに在住する日本語母語話者に変更し、彼らがそれぞれの地域に固有のコミュニケーション・パターンをどのように意識し、それにどのように対処しているかを面接調査することがある。